

## 「現実とフィクションの相互作用：行為・理由・実在性」

オーガナイザー：西條玲奈（北海道大学）

提題者：高田敦史（なし）

松本大輝（東京大学）

筒井晴香（東京大学 UTCP）

ワークショップ趣旨：

このワークショップの趣旨は、芸術的フィクションと現実の行為者が互いに影響を及ぼしうることの不思議を論じることである。フィクションは「作りもの」であり「嘘の一種」であると考えられる一方、現実とまったく無関係であるとも思われていない。文学、美術、演劇、映画、ビデオゲームといった芸術的フィクションの鑑賞体験は、感情や認知のような心的状態を変化させ、時に一定の行動を引き起こすことさえある。そればかりか、たとえばゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』が現実の人々に自殺を促したとみなされたように、フィクションの影響が社会的規模で問題視されることもある。もちろん、私たちはフィクションの中の事物や出来事を文字通りに現実に存在するものとして受け入れているわけでもない。『オイディプス王』の舞台で、オイディプスが旅人を殺害する場面を目撃した観客が、それゆえに警察に通報することはまず起こらない。

それでは、フィクションが現実のものではないということと、フィクションがわれわれの行為に影響を与えることができることとはどのようにして両立可能なのだろうか。このように、現実の実践とフィクションの関係には哲学的問題がつきまとう。哲学的主題としてフィクションの対象を考えると、それが現実のものではないという特徴をもつがゆえに、知覚や信念よりもむしろ、想像力の向かう先として、分析美学の文脈では論じられることが少なくなかった。

だが、本ワークショップは、フィクションと現実の相互作用を、想像力一般の問題としてだけではなく、具体的な芸術的フィクションの鑑賞体験に即して、また行為や感情との関わりで論じることを狙いとしている。そこで、三名の提題者にそれぞれ、高田は、フィクションの事物が現実の行為者の行為を引き起こす理由になりうる可能性を、松本は、虚構の事物へのわれわれの情動は現実の事物へのそれと同種のものであるか否かを、そして筒井は、具体的な「2.5次元」作品に基づいて、虚構のキャラクターの存在と現実の行為者の関わりを論じてもらう。現実のものではないフィクションの対象が、なぜ、どのように現実の行為者に影響を与えるのか、多様な芸術的フィクションの事例を考慮しつつ、その情動の変化や行為の引きがねとなる場面を論じる機会としたい。